
 書 評 ・ 紹 介

허병도 저

『저출산 고령화의 행복』

도서출판 생각나눔, 2012, 302pp.

「低出産・高齢化の幸福」と題された本書は、少子高齢化が急速に進行している韓国社会において、それが必ずしも悪い結果をもたらすわけではなく、裏を返すと明るい未来が到来するかもしれないことを力説した一冊である。

まず、第1章では「韓国, 世界最上位の人口密度」と題し、狭い国土に人口が多すぎることを述べている。第2章「職のない過剰人口」と第3章「人間の尊厳を破壊する失業」では、過剰な人口による職の不足、またそれにより職を得られない人びとの苦痛について言及しており、失業はひいては周りの人間とのつながりを壊すほど、人びとに与える影響は大きいことを語っている。しかしながら、職の不足は人口が過剰になることのみならず、ここ20年間急速に増加してきた高学歴化という韓国ならではの諸事情は考慮されていない。

第4章「女性が人間らしく生きる権利」では、女性に対する差別や女性が堂々と働く権利を保障することが重要であるとし、特に女性が家事や子どもの養育等を主に担うこと、そして教育費を負担することにより生活の質が低下し得るため、子どもを持たないことにより生活の質が改善されるかもしれないと期待している。第5章「兄弟姉妹が多い人と一人っ子の人間性」では、一人っ子の場合、社会性が十分育たないという考え方は偏見に過ぎないとし、アドルフ・ヒトラーは兄弟姉妹が多い人であるにもかかわらず、凶暴な父親の下で育てられたため、歪んだ性格の持ち主になったとする。その一方で、イエスや孔子は一人っ子でもおおらかな性格を持っていることから、兄弟姉妹数は社会性に大きな影響を与えないとしている。第6章「出産, 自然に対する義務なのか?」では、結婚していない男女に偏見を持っている社会の雰囲気や非難し、結婚しなくても充実した人生を送ることができるとしており、彼らこそが人口減少に大いに貢献していると評価している。第7章「高齢者, 知恵と経綸の宝庫」では、長年生きてきているからこそ得られるであろう高齢者の知恵や経験を活かすことが重要であることを示している。

第8章「政府の財政負担能力と政治的ポピュリズム」では、政権を握るために将来の財政負担能力を考慮せず、無償保育や無償給食のように多額の財政支出を余儀なくされる政策は控えるべきであると主張している。第9章「労働市場の開放, 一緒に暮らす地球村」では、先進国の労働力不足は途上国からの労働者を受け入れることで補うことができ、互いに協力する必要があるとしている。外国人労働者の受け入れにより起こり得る問題は、韓国政府の多文化政策等により、それほど大きな問題まで発展しないと予想している。

将来を予測するデータや人間の幸福を明確に定義し、近い将来日本が直面するであろう人口減少社会について分析している松谷明彦・藤正巖著『人口減少社会の設計』に比べ、本書は主観的な記述やデータに基づいていない断言、そして哲学的思想や一般的ではない見解を裏付けとして例に挙げること等が多く、見解が偏っている感が否めないが、韓国において少子高齢化が望ましいと主張している数少ない一冊であり、十分参考になる著書であると思われる。 (曹成虎)